４／７『主の死を告げ知らせる』（Ｉコリント１１：２３～３２）

長谷川　望牧師

＊教会にとって最も大切な過去の出来事は何か。それはキリストの十字架であり、そのあとに続く復活である。主イエスが十字架にかかられる前の日の夜起こった出来事を記念して教会が守り続けていること。それが聖餐である。

＊主イエスは、**「わたしを覚えて（或いは記念して）行いなさい」（Ｉコリント２４、２５参照）**と言われた。2 千年前の出来事がパンとブドウ酒をいただくという行為によって現在にそのまま移されるのである。私たちはこれにより，救いの事実を確認し、救いにあずかっている喜びを体験することができる。それは、聖霊の働きにより、パンとブドウ酒の中に主イエスが臨在してくださるからである。聖餐のパンは、**「だれでもこのパンを食べるなら永遠に生きます」（ヨハネ６：５１）**と言われたいのちのパンであること、そして、神の御子が鞭打たれ、十字架で裂かれて死んだからだを覚えるのである。また、ブドウ酒は、主イエスが流された血による救い、すなわち罪の赦しをあらわす。**「この血による杯はわたしの血による新しい契約です」（１１：２５）**と言われた。旧い契約は神とイスラエルの民との契約であり、モーセが仲立ちをした。新しい契約は神と全世界の人々との個人的な契約であり、イエス・キリストが仲立ちとなられた。契約の証印は旧約では動物の血が用いられたが、新約ではイエスが十字架の上で流される血が契約のしるしとなったのである。

＊**「主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。」（１１：２６）**神の御子イエスの死がなければ私たちの罪はいまだに解決されていない。また、イエスの死は死で終わらなかった。死に打ち勝ち、死からよみがえられたことも示しているのである。聖餐は、信仰告白の見える形である。**「このパンを食べ、この杯を飲むたびに」**とあり、私たちは聖餐式を通して、イエス・キリストの死と復活を信じることによって救われたことを告白するのである。

＊聖餐は、ただの記念ではない。**「したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すことになります。ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。」（１１：２７～２８）**自分がどんなに罪人であるかを認識し、主の十字架に頼るしかないと心から思う人こそ聖餐を受けるにふさわしいのである。